

日蓮聖人の立教開宗をめぐつて

上 田 本 昌

一、求道修学

幼少の時より仏道修行に志を持ち、教法の真実を究めようと努力された是聖房蓮長法師が、遂に一切經の中から正法たる法華經を把握し、末法に最も相応しい最勝の經典であると決定しこの經を依所としたのは、三十二歳の時であり、建長五年（一二五三）の春であつた。即ち、

「随分にはしりまはり十二・十六の年より三十二に至るまで二十餘年が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国々寺々あらあらず習ひ回り候し程に、一の不思議あり。」⁽¹⁾

と見える如く、当時一般に弘まつていた仏教に対し、懷疑を抱き、その解決のために昼夜常精進を重ねたのであつた。その結果、「二代聖教をささるべき明鏡十あり。」⁽²⁾という語で始まる『報恩抄』の最初の部分で、縷々一切經の中では専ら法華經を明鏡として、諸經との対比をおこなうべきことが説かれ究極に於て法華經は「一切經の頂上の如意宝珠なり。」⁽³⁾として、その理由に紙数をを用いている。

したがつて、十二歳の時から鎌倉・京・叡山を始めとして、各地の諸寺を巡り随分に研鑽された結果、『涅槃經』

日蓮聖人の立教開宗をめぐつて（上田）

日蓮聖人の立教開宗をめぐって

如来性品の「依法不依人」及び「依了義經不依不了義經」の文と『法華經』の藥王菩薩本事品の「此法華經亦復如是、於諸經中、最為其上」等の文に依つて、釋尊出世の本懐が法華經であるとし、これを宗旨とするに至つたのであつた。

しかし、この二十餘年間の修學は容易なものではなかつたようである。先ず蓮長法師に対して最初の困難は、仏法の正邪・勝劣を正しく指導してくれる師にめぐり合うことがたやすくできなかったことである。諸所の寺々を廻つても八宗十宗の人師は、互いに自分の宗教の教義に拘泥して、広く嚴正な態度で仏法を究めた人師にめぐり合うことは、たやすくできなかったのである。従つて八宗十宗の人師よりも經典を唯一の師と仰ぎ、「依法不依人」の經說に従い、更に「依了義經不依不了義經」の說示に依つて、一切經を広く学び理解を深めて行くという純粹な方法しかなかったのであつた。

人師・論師の說に依らず、直接仏の說に直參するという態度は、蓮長法師の求道方針が「何によりも眞實を知ろうとする態度」の現われでもあつた。一切經を読み進む中で『無量義經』の「種種說法以方便力、四十餘年未曾顯實」の文から、さらに『法華經』の見宝塔品の「釈迦牟尼世尊、能以平等大慧教菩薩法、佛所護念妙法華經、為大衆說、如是如是、釈迦牟尼世尊、如所說者皆是眞實」との文により『法華經』をもつて「眞實開顯」の經典であることを悟り、ひたすらこの經の信行研鑽に従事したのであつた。二十餘年が間の修學中では、特に比叡山横川での成果が大きく實を結び、「法華最勝」の自信を強固なものとしていつたようである。当時の横川は山中でも静寂な山林の深い環境にあり、源信・親鸞・道元といった新仏教を開いた人々が、いずれも修學に励んだ場所である。全国から立身出世を願つて集まつて来た僧侶が、根本中堂を初めとする華やかな舞台での遊學とは異なり、あくまで眞實探求のた

めの勉強であつたといえよう。「法華三大部」を始めとする諸經の研鑽は文字通り「止暇断眠」の日常であつたろうと推察しうる。事実、後年著作した開・本阿抄を初めとする祖書の五大部だけでも、その中に引用されている經論を見ると、その量は尋常ではないのであつて、この修學期間中に説破した数は、まさに万巻の書籍に及んでいたと考えられる。

しかもインド・中国・日本の三国にわたつて仏教關係の著名な書物はもちろんのこと、歴史や文學に関する書籍から、儒教關係の圖書についても、広い視野に立つて眼を通し、その内容の浅深を掘り当てるといふことは、科學の進んだ現代であつても容易なならざることである。ましてや七五〇年も以前に、こうした學問を修めるためには、仏菩薩の加護を得ることが、何よりも大事な要件であつたともいえよう。一宗一派の教義を身に付けるだけでも、何年間に渡り膨大な資料を学ぶことが必要となる場合が多いのであるから、若き日の蓮長法師の修學は、その後の著述の上からだけ推しても、「止暇断眠」を實踐されていたと考えられてくるのである。故に「仏法をならひ極めんとをわば、いともあらずは叶ふべからず。」とも述べられてゐる如くであり、この文の實踐者であつたといえる。

「然而随分諸國を修行して學問し候しほどに我身は不肖也。人はおしへず、十宗の元起勝劣たやすくわきまへがたきところに、たましく仏菩薩に祈請して、一切經論を勘へて十宗に合わせたるに、(乃至)如是仏法の邪正亂れしかば王法も漸く尽きぬ。結句は此の國他國にやぶられて亡國となるべきなり。此事日蓮獨り勘へ知れる故に、
仏法のため王法の為、諸經の要文を集めて一卷の書を造る。」

此の文に見える「人はおしへず」という点から考えて、周囲の人々は仏法の勝劣浅深について、「わきまへがたき」者達ばかりであつたということにならう。自ら探求するしかなかったのである。「寺とはなづけて候へども修學の人

日蓮聖人の立教開宗をめくつて

なし。」とある状態であつたので、真実を知るにはどうしても「日本第一の智者となし給え」⁽¹⁰⁾という立願と、仏菩薩への祈請によつて学力を与えられることが、八宗十宗を究明するための要件であつたといえよう。仏菩薩の加護によつて、「一切經を見候しかば八宗竝に一切經の勝劣粗是を知りぬ」⁽¹¹⁾という成果が得られたということにも、その求道的情熱が窺えるといえよう。

二、立教までの決意

そこで「一切經の勝劣を知る」ということは、当時の蓮長法師にとつては並大抵の苦行ではなかつたのである。「報恩抄」にその折りの一端が示されている如くであるが、前記の「二代聖教をさとるべき明鏡十あり」⁽¹²⁾として、俱舍・成実・律・法相・三論・真言・華嚴・淨土・禪・天台法華の十宗をあげている。この中の小乗の三宗は別として、大乘の七宗につき究明を進めている。即ち当時の人師によると、一切經の中では華嚴經第一なりという人、楞伽經第一という人等、各自に最勝を唱えて譲らず、一国に王が何人もいるのと同様な状態であつた。そこで「いかにがせんと疑ふところに、一の願を立つ。我れ八宗十宗に随わじ。天台大師の専ら經文を師として一代の勝劣をかんがへしごとく、一切經を開きみる」⁽¹³⁾とある如く、十宗の所説よりも經典への直參を發願したのであつた。人師論師の説に抱泥せず⁽¹⁴⁾にひたすら了義經の法に依つて、真実を究めることにしたのであつた。その結果は

「法華經の法師品に釈迦如来金口の誠言をもて五十餘年の一切經の勝劣を定めて云く、我所説の經典は無量千万億にして已に説き今説き當に説ん、而も其中に於て此の法華經は是れ難信難解なり」⁽¹⁵⁾

と見える如く、已今當の三説超過をもつて法華經の最勝たることを開悟されるに至つたのである。『開目抄』によれ

ば「但法華經計り教主釈尊の正言也。」⁽¹⁵⁾ という結論に到達されたのであった。その『法華經』は諸經において未顕であつた「二乗作仏」と、「久遠実成」の二大法門が説かれ、さらに十界皆成のための最も重要な法門たる「一念三千の法門は但法華經の本門寿命品の文の底にしづめたり。」とあつて、文底秘沈の法門が寿命品の中にあることを明らかにしている。

こうして法華經の最勝たることを悟り、真に自信を深いものとされた蓮長法師は、この事実を知り得た者は他にはいず、「獨り勘へ知れる者」となつたのであつた。当初の疑問が解決したことは大いなる喜びであつたが、同時にそのことは重大な使命と決意を要することになつていたのである。ただ「一人知り得た事」として、個人の問題のみにとどめて置くことはできなかった。仏の真意と法の正邪を判定し、その確信を持った以上、これを秘密にして自身のための法門とし、満足するということは、仏意にも反することになるのである。したがつて「知り得た事」の法悦よりも、これより「知りえた者」として如何に自身が生きて行くべきかの「在り方」を考えた時、そのことの方が遙かに大問題として、重圧感を与え続けていたということができようであらう。

「日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり。これを一言も申し出すならば父母・兄弟・師匠⁽¹⁶⁾・國王⁽¹⁷⁾・王難必來⁽¹⁸⁾べし。いわずば慈悲なきにいたりと思惟するに、法華經・涅槃經等に此二辺を合見るに、いわずば今生は事なくとも、後生は必無間地獄に墮つべし。いうならば三障四魔必競起るべしと知ぬ。二辺の中にはいうべし」⁽¹⁹⁾

と見える如く、「いうべきか」又はこのまま「いわずにすこすべきか」の二辺について、深く心中の奥に於て決断を検討されるに至つたのである。即ち、一言でもいい出すならば自身はもちろん両親兄弟師匠等の系類すべてに迫害の加えられること、また正法を弘めることを妨害する業障・煩惱障・異熟障といった重大な障害が生じ、更に煩惱

魔・陰魔・死魔・天魔といった四魔が次々と生起し、その人を苦境におとし入れるであろう。こうした法難を恐れ
ていわずにおれば、經文によると今生には何事も起きないであろうが、後生に於て必ず無間地獄へ墮ちて、永く苦
しみを受けることになるであろう。知りながらいわずにいることは仏の教えに背くことであり慈悲のない行為であっ
て、仏弟子たる者の最もつしむべきこととされている。全くもって進退の極まつた状態となつたのであつた。

こうした葛藤をへて自問自答のすえに、「二辺の中にはいふべし。」という決断に到達したのであつた。これに至
るまでの苦悩は想像に絶するものがあつたと考えられよう。『開目抄』の文上では簡単に「いふべし」となっている
が、文底にこめられた仏使としての決意は、まさに身命を惜しまぬもの、迫害を覚悟しての一大決心があつた上での
表明であつと考えられる。單に学解の上で法門を理解したというのみでなく、この決意には身命が懸けられていたの
であつて、觀念的な理解ではなく現実に身命に當つての大事であつたといえる。もしも「いふべし」の決意が途中で
法難に会うことによつて、挫けるようなことになつたとしたら、仏使としての使命は果たせなくなり、法門に傷をつ
けたことになると同時に、わが身の名折れとなることは必定である。それならば最初からいわないほうがよいこと
にもなる。「いふべし」と決意した以上はどんな困難があつても、やり通す覚悟ができていなくてはならないのであつ
た。ひとりの人間として生命を懸けるということは、いうまでもなく容易なことではできない。ましてや三類の強敵
が必ず出現して、一命に及ぶような迫害が押し寄せてくることが、經文によるとすでに明らかであるとしたら、普通
の覚悟ではすまされないことになる。

文字通りに「我不受身命 但惜無上道¹⁷」という忍辱の精神と、「一心欲見仏 不自信身命¹⁸」という信行とに徹した
生き方を選び、仏使としての責任を果たす道を歩まれたことになるのであつた。何よりも実践すること、經文を色読

することに中心を置いた行き方に重点を置いたのであって、ここに大きな独自の特色を見ることができるのである。したがって立教開宗に至る直前の心境は尋常なものではなく、思想信仰の上からも実際に生きて行く実生活上の身体的立場からも、大きな決断が必要であつたのである。その根底には当然のことながらまた法華經所説の「法華最勝」の教學上における根拠と、同時に弘教の法師に対する守護が説かれていたことをあげることができる。即ち法華最勝たることは先ず、前述の如く開經の無量義經說法品に、「四十餘年未顯真實」とあり、見宝塔品で「如所說者皆是真實」と多宝如來の証明があり、更に法師品では、

「我所說經典 無量千萬億 已說今說當說 而於其中 此法華經最為難信難解 藥王此經是諸仏 秘要之藏」¹⁹⁾

と明示されている。難信難解にして秘要の藏であるということは、眞実開頭の經典であり最勝の法門が説かれた經典であることを意味している。故に藥王品では「此經亦復如是於一切諸經法中 最為第一一如仏為諸法王 此經亦復是如 諸經中王」²⁰⁾とあつて一切諸經中の最爲第一であり諸經中の王たることが説かれている。その理由は一切衆生を能く救うものだからであり、「悉皆成仏」の經典であるためである。方便品では「最妙第一法」²¹⁾とあり、譬喩品では「最尊無有上」²²⁾とも説示されている如く、法華最勝たることは各經文に明確となつてゐるところであり、蓮長法師の法華經を最上として立教することの確信は充分に得られるに至つたといえよう。

『開目抄』では前述の如く法華の二大法門たる記小と久成をもつて、他經には見られない秀れた法門たることを論じているが、こうした諸点から法華經による立教が不動のものとなつていったと考えられてくる。

三、受持者守護

次に法華經では前述の如く、此の經を弘める人師は必ず強敵に會つて、時に一命に及ぶような迫害を受けることになるということが、勸持品二十行の偈文等で明らかである。法師品では「而此經者 如來現在 猶多怨嫉 況滅度後」⁽⁸⁾とあり、滅後末法の弘經者は必ず怨嫉多きことは必然的であることがわかる。しかしまたその反面において、仏は此の經を弘める人師に対し「化人」を遣わして、聽法の衆を集め信受し隨順せしめることも同時に說かれているのである。法師品によるともしも說法者が「若於此經忘失句逗 我還為說令得具足。」とあり、說法者を保護し補佐して弘經の成果を上げることなす旨が說かれているのである。

「若我滅度後 能說此經者 我遣化四衆 比丘比丘尼 及清信士女 供養於法師 引導諸衆生 集之令聽法
若人欲加惡 刀杖及瓦石 則遣變化人 為之作衛護」⁽⁹⁾

強敵が現れることも事實であるが、則遣變化人によつて為之作衛護ということもまた必ずありうるというのであつて、此の經を弘める者にとつては、此の上ない有力な守護の經文として、最も頼りになるところである。さらに法師功德品では此の經を受持し誦誦し解説書写して、広く説く者は六根清淨となり、聞く者は皆歡喜し諸の測り知れない供養を受けることになるともいわれている。

「諸仏及弟子 聞其說法音 常念而守護 或時為現身」⁽¹⁰⁾

この經文の「常に念じて守護す」という言葉から、諸仏がその弟子らと共に說法者を常に念じていてくれるというのであるから、守護もまた篤く偉大な力を持つてことになるであろう。藥王品でも法華經を他人のために説く者に

ついては、「所得福德無量無辺 火不能_レ燒水不能_レ漂₍₂₆₎」とあり、「諸餘怨敵 皆悉摧滅」とも説かれているのである。説法者がこのように仏によつて加護されるというのであるから、法師にとつて「經文に身をまかすこと」ができる決心をつける上で大きな力となつていったものと考えられてくるのである。「人に依らず、法に依る」という基本から考えても、こうした經文が法師の上に多大の作用を及ぼしたことは、当然考慮されてくるものといえる。「百千諸仏以神通力 共守護汝」という經文は、まさしく説法者を百千もの諸仏菩薩が汝（他人のために説ける者）を守護するという証文であり、仏使として此の經を弘めることを決心した行者にとっては、忘失することのできないものといえる。

「我滅度後 後五百歲中広宣流布 於閻浮提無令斷絶 惡魔魔民諸天龍夜叉鳩槃荼等 得其便也。」とあることから、末法に広宣流布して断絶せずに諸の惡魔が襲撃の機会を得ず、布教の目的が達せられるようにすると言う經文から推しても、行者即ち布教者の守護が約束されていることになる。

さらに妙音品では三十四身に姿を現して衆生のために法を説き救済活動を展開する妙音菩薩のことが説かれ、「是妙音菩薩 能救護娑婆世界諸衆生者。」とあるので、娑婆の衆生が此の菩薩によつて救護され饒益されることが明らかである。その三十四身の中には梵天・帝釈・毘沙門天・天輪聖王といった守護の諸天を代表する諸神を始めとして、天・龍・夜叉等にも身を変じて守護することが述べられている。こうした文からすると妙音菩薩の守護だけでも偉大な力となつて、諸天善神の加護が受けられることになる。

また次の普門品を見ると、周知の如く觀世音菩薩がこれまた三十三身に變現して守護をなすことが説かれる。

「或遭王難苦 臨刑欲寿終 念彼觀音力 刀尋段段壞」₍₂₇₎

日蓮聖人の立教開宗をめぐつて(上田)

日蓮聖人の立教開宗をめぐって

「応時得消散」「衆怨悉退散」

これらの文が示すごとく、大きな危険に曝されたとき、兇惡な敵を直ちに退散させる働きを持ち、守護を現すことが記されている。しかも次の陀羅尼品においては、法華經の一四句偈であつても受持し誦誦して説の如く修行する者の功德は甚大であることを説いたあと、藥王菩薩が仏に対して「我今当与説法者 陀羅尼呪以守護之」と述べている。説法者即ち法師を防衛し庇護することが説かれてをり、続いて勇施菩薩・毘沙門天王・持国天王等から十羅刹女・鬼子母神に至るまで、皆法師を擁護することが誓約されている。

「若不順我呪 惱乱説法者 頭破作七分 如阿梨樹枝（乃至）調達破僧罪 犯此法師者 当獲如是殃。」

法師に危害を加えた者の受ける罪について、「頭破作七分」といった具体例をあげて殃を受けることが説かれている点、特に注目されるところである。法師を守るのみならず危害を加えた相手を懲らしめ制裁を与えるという積極的な行動に出ることが記されてをり、法師の守護に力を注ぐことがわかる。それだけ法師の存在を重く視ていることになる。

かくして最後の勸発品では普賢菩薩が仏に対して、次の如く誓言をなしている。

「世尊、於後五百歲濁惡世中、其有受持是經典者、我当守護除其衰患、念得安穩、使無伺求、得其便者。」

法華經受持者に対し、我はまさに守護して衰患を除き、安穩を得せしむるという誓約を立て、惡魔等が出現した場合は、「六牙の白象王」に乗り、「而自現身供養守護安慰其心」というのである。またもし受持者が一句一偈であつても

忘失した場合は、「我当教之 與共誦誦還令通利」と守護の上にさらに教導することも誓っているのである。

これは単に受持者を危害から守り安穩ならしめるということにとどまらず、その受持者が布教する際に、万一經文を忘失した場合、進んで教導し支援することを示していることから考えると、此の經の弘布がいかに重大なことであつたかを物語っているといえる。したがって經文には、

「於如来滅後 閻浮提内広令流布 使不断絶」

とも語られている。仏は普賢に対して此の經を受持し修習書写する者あらば、この人はまさに仏を見て、仏の口より經を聞き、仏を供養するものであり、仏の手で頭を摩でられることをえ、仏の衣で覆われることをうるとも説かれている。かくして此の經を受持する者を見たら、まさに起ちて遠くより迎え、仏を敬うが如くにすべきであると述べ、受持者をして最大限の待遇をもつて敬意を表し、恭々しく接すべきことを説示している。

このような經文から考えられることは、法華經の受持者・經を弘める法師は、勸持品によつて代表される如く、悪魔・強敵により身命に及ぶ程の迫害を受けることになり、その危害は肉親一族にまで波及することとなるであろうと説かれているが、またその反面で如上の經文の如く、諸天善神を始め仏・菩薩がこの法師・行者・受持者を必ず守護し、仏と等しく供養を受けることができる旨が説かれているのである。

四、身輕法重

一經の中で受持者・行者に対し、迫害が強敵より加えられると説きつつ、又その受持者は諸天等守護の善神から加護をこうむるという全く相い反した説が見られるということは、一見矛盾した經典と受けとめられようが、正法を弘

める者は釈尊でさえも九横の大難に会われていることから考え、やむをえないことであつて、世の中は常に正邪の争いは間断なくつづけられているのである。人類にとつての悲しい現実であり、苦の娑婆の一面を表しているといえる。法華経ではこうした現実をよくとらえ、迫害は避けられないことを説くと同時に、だからこそ諸天の守護も必要であり、行者への支援も約束されるに至っているのである。

前述の如く法華経が釈尊出世の本懷であり、真実開頭の最勝正法たることを知つてしかも申さずにいたら、教主釈尊の大怨敵となり後生は無間大城に落ちて出る期のないことを知つた蓮長法師は、国主の王難を始め諸難を恐れずに仏使としての道を選ぶ決意に到達したのであり、立教の基本となつていったものと考えられる。『三沢抄』によると、

「たとひ明師竝に実経に値ひ奉りて正法を得たる人なれども、生死をいで仏にならむとする時には、かならず影の身にそうがごとく、雨に雲のあるがごとく三障四魔と申して七の大事出現す。」⁽¹⁾

とあり第六天の魔王が種々の大難を生起させ、行者を苦しめることが説かれ、「今度いかなる大難にも退せぬ心ならば申し出たすべしとて申し出し候しかば、経文にたがわず此の度々の大難にあいて候しぞかし。」⁽²⁾とある如くであり、「いかなる大難にもこらへてん」という言葉が示しているように、「申しいだす」こと、即ち立教による受難の覚悟は尋常なものではなかつことがわかる。『種種物御消息』には「此法門は当世日本国に一人も知りて候人なし。ただ日蓮一人計りにて候へば、此を申さずば日蓮無間地獄に堕ちてうかぶ期なかるべし。」⁽³⁾とあり、さらに「申せばかたき雨のごとし風の如し、むほんのもののごとし。」ともある。当時、謀反は嚴罰に処せられていたので、如何に法敵が強烈なものであつたかを窺うことができよう。「申せば」ということは言うまでもなく法華経真実最勝ということであり、「汝早く信仰の寸心を改めよ」という破邪であり、「速に実乗の苞善に帰せよ」という頭正の行動をとまなうも

のであり、ここに立教が実施され弘經活動の原点となつていたのである。

「日蓮一人」ということは、全く孤独の出発であり、「唯我一人能為救護」の仏意に通ずる心境でもあつたらうと推察しうる。安易ならざる決意がこの言葉の中にこめられていたものとかんがえられる。同志を募つて旗あげをするということとは全く異なり、万一の場合は日本中が敵となつて襲ひ掛かることもありうるのであり、身命を惜しんでいてはできない立教であつた。「身軽法重」の精神で一貫された門出ということになる。また『報恩抄』によれば、迫害を恐れて申さずば仏勅にそむく者となり、申せば法難おそろしということで、「進退此に谷り」と率直に心情を吐露されている。決断されるまでの心理的なプロセスがあつたことを物語つていえるといえよう。一直線に曲折なく立教へ進まれた訳ではないことがわかる。

しかしこうした段階をふまえながらも、敢えて「申すこと」に踏み切つたのは、仏弟子として仏恩に報ずるためであつた。『二谷入道御書』によれば、

「但日蓮一人計り此の事を知りぬ。命を惜て云はずば国恩を報ぜぬ上、教主釈尊の怨敵となるべし。是を恐れずして有のままに申すならば死罪となるべし。設ひ死罪は免るとも流罪は疑ひなかるべしとは兼ねて知てありしかども、仏恩重きが故に人をはばかりず申しぬ。」

とある如く、先ず(一)教主釈尊の御敵となることを恐れ、(二)仏恩の重きを感じて、「はばかりず申しぬ」という結論になつた。(一)と(二)は表裏一体のものと考えられるので、仏敵となることを最も恐れると同時に、仏恩の重きを痛感して、死罪流罪を覚悟の上で「はばかりず申しぬ」となつていたのであつた。蓮長法師にとつて教主釈尊は主・師・親の三徳を兼備した一切衆生の等しく尊敬すべき最上の存在であつたのである。この御書は建治元年五月身延山での著作

日蓮聖人の立教開宗をめぐる

であるが、立教開宗の直前までにこうした趣旨を充分に自覚されていたのであった。後年身延の山から往時のことを回想して、右のような著作になっていったのである。

尚、『弥三郎殿御返事』にも同様の文が見られ、『頼基陳情』では涅槃經の文『若善比丘壞法者 当知是人仏法中怨』の引用をして、「あへてをこたる事なし」と述べているのである。仏法中怨の責め苦をのがれるためと、重き仏恩に報いるがために、怠ることなく心血を注いだのであった。同様の文は『高橋入道殿御返事』にもあり、「いかんがせんとをもひしかども、をもひ切つて申し出しぬ。(乃至) 日蓮が法華經の行者なる事も疑はず。」とある。この文も又蓮長時代のことを振り返つての、立教直前における心境を表明したものである。さらに行者たることを疑はずというのは、日蓮と名乗られてからの法難経験後における法華經色読の結果、得られるに至つたものといえよう。

五、むすび

かくして蓮長法師は、幼少の年より三十二歳に至るまで各地をめくり、厳しい修学の結果、如上の結論を得て、立教開宗へ大きく前進したのであった。上來所説の如く立教までのプロセスには身命を懸け、心血を注いで求め法修行のため、文字通り止暇断眠の歲月であつた。このことを推察するとき、単なる思いつきや安易な心持で立教に望まれたのではないことが、当然のことながら明白となつてくる。教学上からも自身の純粹な宗教的立場からも、敢えて最大の困難を覚悟しつつ、一方では守護の諸天善神の加護を祈念しつつ、仏使としての使命達成のため、一身をなげうつての立教であつたことがわかる。

建長五年四月二十八日に『聖人御難事』の記述の如く、清澄寺の諸仏坊持仏堂の南面に於て、「此法門申しはじめ

て」とある通り、最初の弘経活動が展開されていたのである。「一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人但日蓮一人なり。」という自負を持ち、末法に仏出世の本懷を遂げるべく、前述の法難覚悟で、諸天の守護を信じつつ仏使としてのスタートを切ったのであった。⁴⁰ その日に至るまでの準備段階が如何に重要かつ厳しいものであったかを考察し、その一端を究明することにより、改めて立教開宗の意義を深く厚いものとする事ができよう念じつつ執筆を進めた次第である。

七五〇年を経た今日、蓮長から日蓮へと名乗られた聖人の立教開宗と、そこに至るまでのプロセスを問いなおし、それを現代に活かすことが門下にとつての責務であるといえよう。敢て開宗前、蓮長法師の時代にピントをあてて一見してきたのも、そうした意図によるものである。⁴¹ 開宗以後の聖人については数多くの人師によつて論究されてきているところであるが、むしろそれ以前の開宗に至るまでを知ることが肝心であり、聖人の仏使としての真意を得る上からも極めて重要なことであるといえる。仏使として受難の道を選ばれた真意は、実に立教開宗の前段階において、悲壮なまでの決意の中から生まれてきたものといえよう。

〔註〕

- (1) 妙法比丘尼御返事 定遺一五五三頁
- (2) 報恩抄 同 一一九三頁
- (3) 同 同 一一九五頁
- (4) 涅槃經如来性品 大正藏十二四〇一
- (5) 法華經藥王品 同 九一五四
- (6) 無量義經說法品 同 九一三八六

日蓮聖人の立教開宗をめぐって(上田)

日蓮聖人の立教開宗をめぐって

| | | | |
|------|---------|-----|---------|
| (7) | 法華經見宝塔品 | 同 | 九一三二 |
| (8) | 報恩抄 | 定造 | 一九二頁 |
| (9) | 本尊問答抄 | 同 | 一五八〇〜二頁 |
| (10) | 善無畏三藏抄 | 定造 | 四七三頁 |
| (11) | 清澄寺大衆中 | 同 | 一一三三頁 |
| (12) | 報恩抄 | 同 | 一一九三頁 |
| (13) | 同 | 同 | 一一九四頁 |
| (14) | 同 | 同 | 一一九六頁 |
| (15) | 開目抄 | 同 | 五三九頁 |
| (16) | 同 | 同 | 五五六頁 |
| (17) | 法華經勸持品 | 大正藏 | 九一三六 |
| (18) | 同 壽量品 | 同 | 九一四三 |
| (19) | 同 法師品 | 同 | 九一三一 |
| (20) | 法華經藥王品 | 大正藏 | 九一五四 |
| (21) | 同 方便品 | 同 | 九一九 |
| (22) | 同 譬喻品 | 同 | 九一二 |
| (23) | 同 法師品 | 同 | 九一三一 |
| (24) | 同 | 同 | 九一三二 |
| (25) | 法華功德品 | 同 | 九一四九 |
| (26) | 同 藥王品 | 同 | 九一五四 |
| (27) | 同 妙音品 | 同 | 九一五六 |
| (28) | 同 普門品 | 同 | 九一五七 |
| (29) | 同 陀羅尼品 | 同 | 九一五九 |
| (30) | 同 勸発品 | 同 | 九一六一 |

- | | | | |
|------|---------------------|------|------------------------|
| (31) | 三沢抄 | 定造 | 一四四頁 |
| (32) | 同 | 同 | 一四四頁 |
| (33) | 種種物御消息 | 同 | 一五三〇頁 |
| (34) | 報恩抄 | 同 | 一九八頁 |
| (35) | 一谷入道御書 | 同 | 九九三頁 |
| (36) | 弥三郎殿御返事 | 同 | 一三六八頁 |
| (37) | 頼基陳情 | 同 | 一三五一頁 |
| (38) | 高橋入道殿御返事 | 同 | 一〇八七頁 |
| (39) | 聖人御難事 | 同 | 一六七二頁 |
| (40) | 拙著『日蓮聖人の救済観』 | 二四頁 | 「是聖房蓮長の求道」の項を参照されたい。 |
| (41) | 拙著『日蓮聖人における法華仏教の展開』 | 二八八頁 | 「法華經行者値難の意義」の項を参照されたい。 |